

ICTを活用した双方向授業活用の日本語教員養成プログラム

—2023年度までの報告と授業内フィードバックの実際—

安原 順子

1. はじめに

2023年5月23日、文化庁は日本語教育において国家資格として「登録日本語教員」制度を新設すると発表した。それにより2024年4月1日より、「登録日本語教員」制度が始まり、日本語教員は「国家資格」となる。今後の日本語教育の普及を見据え、また国内外で増加するであろう多様な日本語学習者に対応するためである。国家資格となれば、今後は日本語教員には、より専門性が高い能力が求められることになる。

コロナ禍において、国内外では対面授業とともにオンライン授業が実施されてきたが、この間外国人への日本語教育分野においても、マルチメディアを使用した教育の実践に著しい進展が見られた。国外では、近年開催が見送られていたICJLE2024日本語教育国際研究大会の開催が決定した。国内外の日本語教育において、マルチメディアを使用した日本語教育への関心はさらに高まっている。

本研究は、ICTを使用し学習者オートノミーを育てることを目標に、eポートフォリオを使用した日本語教員養成の学習プログラムを構築することにある。また、ICTと対面授業を組み合わせたハイブリッド型学習プログラムの構築を目指している。コロナ禍が続く中、国内外では対面授業とともに引き続きオンライン授業も実施されている。外国人への日本語教育分野においても、マルチメディアを使用した同様の授業形態が実施されている。日本語教育関連の学会や研究会、研修会は、今もオンライン開催が主流となっており、日本語教育学会の発表ではICT使用の教育の試みが多数報告されている。国内では、(社)私立大学情報教育協会の主催で「教育イノベーション大会」が毎年開催され、eポートフォリオ、e-learning、iPad、ブログなどを使用した日本語教育の試みも多数報告されている。国外では、近年隔年に対面で開催されていたICJLE日本語教育国際研究大会が、2024年に開催されることになった。日常を取り戻しつつある現状ではあるが、今後もICT使用の授業がなくなることはなく、国内外の日本語教育において、ICTを使用した日本語教育への関心はさらに高まると考えられる。

本研究は、ICTを使用し学習者オートノミーを育てることを目標に、eポートフォリオを使用した日本語教員養成の学習プログラムを構築することにある。また、ICTと対面授業を組み合わせたハイブリッド型(ハイフレックス型)のプログラムの構築を目指してい

(29)

る。1960年代のヨーロッパが発祥地であるとされている「学習者オートノミー」の研究は、近年、アクティブ・ラーニングにつながる言語教育領域としても関心が向けられ、アクティブ・ラーニングは、オンライン授業の一方法として注目されている。

本稿では、2022年度までの報告と新たな授業内フィードバックについて実践報告を行い、これまでの日本語教員養成のプログラムを精査する。

2. 研究目的

本研究の目的は、日本語教員養成と日本語学習に資するオンライン上の双方向授業においてeポートフォリオ等を活用し、学生が自律的に学習する学習者オートノミーを育てる授業プログラムを構築することにある。reflective journal（学習ダイアリー）^{注1}を使用する双方向授業を生かし、海外の大学との間で日本語教員養成と日本語学習に資する双方向授業を実施し、eポートフォリオに学生が提出したreflective journalや日本語実習教案を質的に分析する注2ことで、日本語教員志望者に有効な学習者オートノミーを育てるプログラムについて研究する。日本語教育・日本語学習において、学習者を主体にしたICT使用の学習プログラムについての研究は、今後もアクティブ・ラーニング、遠隔授業の一形態として大いに期待される研究分野である。

異文化間コミュニケーションにおけるオンライン上の双方向授業とreflective journalの使用については、その効果が質的に分析され、有効性は実証されている。しかしながら、それだけでは、さらに十分な知識と指導力を持った日本語教員の養成にはつながらなかった。そこで、これまでの双方向授業の研究成果を踏まえて、学習者オートノミーを育む「気づき」を得るために、日本語教員を目指す学生にどのようなフィードバックを与えれば良いかを考えた授業モデルを研究対象とすることにし、日本語教員養成に資する学習プログラムの構築を目指すこととした。

3. 研究の意義と研究の位置づけ

本研究は、授業における実践を研究対象とし、コロナ禍でも海外との交流が増加する中、遠隔授業の一つとしての授業モデルを構築するところに独自性と創造性がある。

また、研究の成果から、海外の日本語学習機関との新しい学習プログラムの構築と質の向上が見込まれる。さらに、その結果が双方向授業を使用した学習プログラムの構築へとつながった。

研究の成果は、遠隔授業の一形態として、さまざまな学習者主体の学修プログラムにも応用が可能であり、普遍性を持つ研究課題であると考えられる。主役は学習者であり、双方向学習プログラムは学びを促進するツールとして活用でき、学びのネットワークの起点となる。本研究を基礎研究として位置付ければ、さらに双方向学習プログラムの活用方法

が拡がり、波及的な効果も期待できる。

4. 先行研究

これまでの研究では、海外の大学とICT使用の双方向学習による学習者オートノミーを対象とした日本語教員養成の研究報告は少なく、したがって授業モデルの構築にも至っていない。本研究は、授業における実践を研究対象とし、海外との交流が増加する中、遠隔授業の一つとしての日本語教員養成の授業モデルを構築するところに独自性と創造性がある。

さらに、本研究は以下のような学術的独自性と創造性を持つ。

- ① ICT利用の双方向授業を活用し、学習モデルを構築している点。
- ② reflective journalの使用とそのeポートフォリオ化により、学生自身の「学びの気づき」と「学習者オートノミーの構築」を重視している点。

本研究の成果からは、海外の日本語学習機関との学習プログラムを使用した学習者オートノミー育む、新しい日本語教員養成プログラムの構築とその質の向上が期待できる。

5. 学生の気づきと学習者オートノミー

本研究は、日本と海外の大学との「ICTによる双方向授業」を中心に、「学習者オートノミー」の育成に焦点を当てた研究である。近年、日本語教育における日本語の熟達度を知る基準としてヨーロッパ言語共通参照枠CEFRに準じたJF日本語教育スタンダードが取り上げられている。学習者オートノミーは、1960年代のヨーロッパで生まれた概念であり、CEFRには学習者オートノミーを育む取り組みが不可欠とされる。そのため、JF日本語教育スタンダードの実施は、学習者オートノミーの概念抜きでは機能しない。JF日本語教育スタンダードのポートフォリオも、ヨーロッパ言語ポートフォリオを踏襲している。学習者オートノミーを育てるためのアプローチについては、そのひとつに「IT技術を利用したもの」が挙げられている。また、ICTによる外国語教育は、遠隔授業を行うために必要な手段の一つでもあり、国内外における外国人への日本語教育においては、ICTによる日本語教育への関心が大いに高まりを見せている。

このように関連性があるにもかかわらず、本研究課題のようにこの二つを兼ね合わせた、つまり日本と海外の大学との「ICTによる双方向授業」を中心に日本語教員養成のための「学習者オートノミー」の育成に焦点を当てた研究は少なく、それぞれの特色を活かしていないのが現状である。

本研究では、ICTの利用による学習者オートノミーの育成に関して、新たに以下の3つの効果が期待できる。

(31)

- ① 学生が主体的に学修し、成果を実感できる。(自己評価)
- ② 担当教員も授業の効果や問題点を把握しやすい。(教員による評価)
- ③ 学生同士の相互評価が期待できる。(相互評価)

6. 意識化タスク

島田(2022)は「意識化タスク」を中心とする英語の文法指導を例に挙げ、母語習得と同じ学修プロセスに沿った指導手順を示している。

また、次のように、その際必要とされる教師の役割とは、「意図的に、あらかじめ整理されたデータを多く与えて規則に気づかせる手立てを考える必要がある」ことであると述べている。

これは、外国人に教える日本語教師については実際の誤用データと、それに加えて指導する教師からの新たなデータ追加を意味する。自律的な学習者を育てるには、文法や音声の誤用データから、その原因・理由を見つけ出すことが求められる。ただし、その「気づき」を引き出し育てるためには、同時にどのようにそこまでの道筋を導いていくかという教師の力量も必要になる。

特に、本研究課題では、これまでの成果に「学習者の自律性」を助ける授業中のフィードバックを付加したプログラムにも焦点を当てている。いわゆる自分で学んでいける学習者を育てる「学習者オートノミー」に焦点をあてて、さらに双方向授業についての研究を継続・拡張する準備を行った研究である。

7. 研究計画・研究方法

7.1 研究計画 2022年度まで

神戸女子大学と提携校であるニュージーランドのオークランド工科大学(以下AUTと略す)間で、AUTonline(AUTが管理するe-learningシステム、2022年度はCambasAUTに変更)を使用した双方向授業として、研究対象となる授業の試行と連携教育を行ってきた。大学3年生を対象に、1年間に2種類の授業を行い、授業を通した日本語指導者の育成方法とreflective journalを質的に分析した結果から学習の有効性を検証した。reflective journalをeポートフォリオの一部として活用し、質的に分析^{註2}した。また、eポートフォリオの内容をチェックし、必要な助言を与えることで、効果的に日本語教員を育成する方法論を明らかにした。

7.2 研究方法

・学生がeポートフォリオに提出した以下の対象授業のreflective journal、指導案、レポートなどを分析し、自己評価、相互評価、教師による評価を行う。

- ・双方の学生は、以下の授業に参加し、毎週各自が学習を自己評価して、その結果を reflective journal として双方向授業ではmanaba神戸女子大学（神戸女子大学が管理するe-learningシステム）に提出^{註3}、常時「学習の振り返り」を行う。
- ・神戸女子大学学生は、外国人日本語学習者の使用する日本語から、文法・音声の誤用についてレジュメにまとめて授業で発表し、eポートフォリオとしてmanaba神戸女子大学に提出する。

(1) 対象となる授業1：

対象者：神戸女子大学…3年生の日本語日本文学演習Ⅱ（日本語教育ゼミ）

AUT…3年生主体のJapanese Oral Interaction（AUT日本語科の日本語クラス）
それぞれ平均10名程度の参加者

授業内容：双方向授業…AUTonlineを使用し、実施する。

双方向授業のテーマ：「ソトから見た日本人、ウチから見た日本」「海外長期滞在と移住」など。

AUT と神戸女子大学生でグループを作り、グループごとに一つのブログを用意する。

① ブログ使用の授業：文字を使用する双方向授業

AUT 学生は2週間ごとに各テーマについての課題作文をブログに書き込む。

神戸女子大学生は、それに対するコメントをブログに書き込む。

② Zoom使用の授業：音声を使用する双方向授業

担当教員がZoomでのインタビューを設定し、ブログのテーマに沿って日本人学生が用意し、ブログ上に書き込んだ質問に答える。毎週、1グループ約15分間の交流を行う。

(2) 対象となる授業2：日本語模擬実習、日本語チューター

参加予定学生：神戸女子大学生（上記に同じ）

授業内容：日本語指導の実践…eポートフォリオを通して実習の指導を行い、教育実習案、教材、reflective journalを提出する。本学の特色である古典芸能についての解説も含む。

① 日本語模擬実習（海外教育実習を含む）

校内、海外でeポートフォリオを活用した日本語教育実習を実施する。

② 日本語チューター

授業の一環として外国人留学生・研修生対象の1回完結型の日本語指導を毎週行う。指導は、外国人が日本語で「～できる」ことを重視する。また、Plan（企画）、Do（実施）、Check（点検）、Action（改善）というPDCAサイクルを重視し、常に外国人のニーズの変化に対応できるようにする。

(33)

その結果を基にプログラム有効性について検証し、さらに改良を加え、構築したeポートフォリオを活用した双方向学習プログラムが他の機関での授業モデルとなることを目指す。

(1)日本語教員養成と日本語学習者のため双方向学習プログラムモデルの構築と検証

神戸女子大学学生：双方向授業などを通し外国人の書いた日本語を読んだり、話した日本語を聞いたりすることや、実際に外国人への日本語指導を通して得た知識や指導力を、eポートフォリオの提出物から振り返る。

AUT学生：日本人学生と接して、日本語学習に対する学習姿勢にはどのように変化があったか。

(2)双方のreflective journalを質的に分析した結果から考察した学習効果の検証

使用する質的分析は、SCAT (Steps for Coding and Theorization) と称され、言語データを4ステップでSCATフォームに書き込み、さらにストーリー・ラインと理論を記述する。

8. 学生の「気づき」と「学習者オートノミー」

本研究は、日本と海外の大学との「ICTによる双方向授業」を中心に、「学習者オートノミー」の育成に焦点を当てた研究である。このように関連性があるにもかかわらず、本研究課題のようにこの二つを兼ね合わせた日本と海外の大学との「ICTによる双方向授業」を中心に日本語教員養成のための「学習者オートノミー」の育成に焦点を当てた研究は少ない。それぞれの特色を活かせていないのが現状である。

本研究課題では、これまでの研究成果に加えて「学習者の自律性」を助ける、授業中の学生の「気づき」を引き出すプログラム構築にも焦点を当てる。いわゆる自分で学んでいける学習者を育てる「学習者オートノミー」に焦点をあてて、さらに双方向授業についての研究を継続・拡張する準備を行った研究である。

9. 学生への授業内フィードバックの効果

9.1 授業内フィードバックの効果

学生への授業内フィードバックにより、以下のような効果が見られた。

(1)自分で学んでいける学生が育つ

(2)レジュメによる発表を行うと、レジュメの書き方、レジュメを使用した発表の方法が分かる

(3)さまざまなAUT学生の日本語能力に関する情報を共有し、一般化できる分析力が育つ

(4)教員はより効果的な学生へのフィードバック方法を発見できる。

ここでは、授業でのレジュメ使用の発表を通したフィードバックの例をあげる。

レジュメ発表は、A4 2枚に次の項目について「AUT担当学生の日本語の誤用」を発表する。作成したレジュメは、当日発表前にmanaba神戸女子大学の所定の掲示版に提出する。

- ① 学習者の紹介
- ② 書き言葉の分析
- ③ 話し言葉の分析
- ④ まとめ

9.2 具体例

① 学習者の紹介

担当するAUT学生のプロフィールを紹介する。

② 書き言葉の分析

AUTオンライン上の交流ブログから、誤用を、抽出し訂正する。

誤用の文章を訂正するに当たり、このAUT学生には日本語についてどのような特徴が見られるだろうか。誤用の訂正は、日本語母語話者にとっては慣れればそれほど困難ではない。しかし、そこから学習者の誤用の特徴を見つけ日本語教育に応用する力は、改めて伸ばすしかなかく、教授者としての学習者オートノミーの育成に繋がる。

例えば、AUT学生とのオンライン上の交流から次のような誤用の例が見られる。

a 「な形容詞」の誤用…「な形容詞」を「名詞」と誤用している。

誤用 → 訂正

- ・好きのクラス → 好きななクラス。
- ・ひまの時間 → ひまな時間

「な形容詞」は、「名詞」を修飾する場合、

好きな、ひまな…そのまま「名詞」を接続する。

好きなクラス、ひまな時間

好き、ひま…「名詞」の前に「な」を入れる。

好きななクラス、ひまな時間

b い形容詞過去形の誤用…な形容詞の過去形を誤用している。

誤用 → 訂正

- ・すこし悲しでした。 → すこし悲しかったです。

(35)

・回線が悪いでしたが、たのしかったです。 → 回線が悪かったですが、たのしかったです。

c 「だ」の誤用、「だ」の過剰使用

誤用 → 訂正

・〇〇さんもすきと思います。 → 〇〇さんもすきだと思います。

・できることが多いだと思う。 → できることが多いと思う。

前出の誤用文（「だ」の脱落）の理由は文法規則の「過剰般化」によるものである。

つまり、

誤用 訂正

・〇〇さんもすきと思います。 → 〇〇さんもすきだと思います。

・できることが多いだと思う。 → できることが多いと思う。

「～と思います」に接続する形は、品詞により次のように変化する。

		「だ」の有無
動詞	休むと思います	×
い形容詞	多いと思います	×
な形容詞	好きだと思います	○
名詞	学生だと思います	○

表1. 「～と思います」に接続する形の「だ」の有無

ところが、このAUT学生はだ「～と思います」の「と」の前がそれぞれ名詞であるにもかかわらず、「だ」を付与していない。

③ 話し言葉の分析

Zoomを使用した交流から、音声の誤用を、抽出し訂正する。音声での誤用については、予めどのような点に着目するかのヒントを与えて分析させた。これらは、学生の母語・家族間での使用言語によって異なるが、概ね次のような項目立てができる。

d 長短音の発音…多くは、長音を短音と発音する誤用である。

いじよです → いじょうです

どよび → どようび

e 促音「っ」の脱落…多くは、促音が脱落する誤用である。

いなかた → いなかつた

ちよと → ちよっと

f 清濁音の発音…濁音が清音となる誤用が多い。

たいがく → だいがく (大学)

g カタカナ語の発音…主に、原音のまま発音する、長音が短音となる誤用である。

ニュジランド → ニュージーランド

Online → オンライン

h アクセント…誤用には、母語の影響が大きい。

おんがく → おんがく (音楽)

④ まとめ

結果の分析と発表者の意見

発表を通して、誤用が同じ理由によって起こることが分かれば、学生の教授能力に成長が見られたと考えられる。

10. 意識化タスクを使用した今後の指導

2023年には、2022年度までに加え次のような指導手順を考案したが、実際にはうまく使用できず、期待される大きな効果も得られなかった。上記の誤用を例にとって、今後のフィードバックとしての意識化指導を組み立てると、以下のようにヒントを与える順序が考えられる。

「気づき」を引き出すヒントは、すべてを与えるのではなく、必要に応じて与える。

- ① 加工されていない誤用データを与える。
- ② 追加として指導用に加工（教師が手を加えたもの）したデータを示す。
- ③ 正解に至る例文を示す。
- ④ 正解の規則を示す。
- ⑤ 学生には、その規則を他の例文にも適用させ、規則の正確さを再度確認させる。

11. まとめ

本稿における「学習者オートノミーの構築」のための授業内フィードバックを重視する試みは、オンライン上の双方向授業におけるeポートフォリオや発表を活用し、学生が自律的に学習する学習者オートノミーを育てる授業プログラムの構築に寄与できると考える。

本研究の成果により、学習者の学習への意欲の向上とともに、海外の日本語学習機関との新しい学習プログラムの構築が見込まれる。その結果は、双方向授業を使用した学習プログラムの構築へと拡がり、さらにその成果が「学習者オートノミーの育成」に繋がる。

(37)

教授者には、教授能力を高めることができるような効果的なフィードバックが必要とされるため、今後は「意識化タスクを使用した指導」によるフィードバック方法にも注力していきたい。

謝辞：本研究はJSPS科研費 JP16K02832、JP20K00716の助成を受けたものです。

注

注1 常時、各自が学習を自己評価し、その結果を提出、「学習の振り返り」を行うために使用する。

注2 大谷尚（2011）による。本研究課題のような小規模データ分析に適した方法である。

注3 神戸女子大学onlineシステム。

参考文献

青木直子・中田賀之編（2011）『学習者オートノミー 日本語教育と外国語教育の未来のために』ひつじ書房

大谷尚（2019）『質的研究の考え方 研究方法論からSCATによる分析まで』名古屋大学出版会

館岡洋子（2015）『日本語教育のための質的研究入門』ココ出版

中田賀之編（2015）『自分で学んでいける生徒を育てる』ひつじ書房

安原順子（2022）「ICTを活用した双方向授業活用の日本語教員養成プログラム—2021年度の報告と授業内フィードバック（2）—」『神女大國文』第33号pp. 95-106

安原順子（2023）「ICTを活用した双方向授業活用の日本語教員養成プログラム—2022年度の報告と授業内フィードバック（3）—」『神女大國文』第34号pp.53-62

横溝紳一郎、山田智久（2019）『日本語教師のためのアクティブ・ラーニング』くろしお出版